

随想



ふじもり・てるのぶ/1946年長野県生まれ。東京大学生産技術研究所大学院修了後、85年より同研究所助教授。日本の近代建築と都市計画を研究するなかで、都市内をしらみつぶしに踏査する研究方法を実施し、「建築探偵」として脚光をあびる。86年には「路上観察学会」を結成するなど、エネルギーな研究を続けている。著書に『建築探偵の冒険』『建築探偵東奔西走』『看板建築』など多数。

建物は、大正五年に三井銀行神戸支店として建築家の長野宇平治のデザインで完成されたものであり、前面に長さ一メートルの一本石から切り出された柱が六本ずらりと並び、日本の最初のギリシャ神殿風の銀行建築としてつとに名高い。例の戦前の、石の列柱が並ぶ重厚で威風堂々とした銀行建築のスタイルはこの一作から始まるのである。

この、専門的というよりもイオニア式の柱こそ、日本の建築家がヨーロッパの建築様式と取り組んでついに自家薬籠中のものとした記念碑なのである。所有者の第一勸銀は、この大正の歴史的名建築を大

このたびの阪神・淡路大震災についてはあれこれ思うところがあった。

まず第一は、ちっとも文化財建造物の被災状況が映し出されないことへの不安と不満。当日、朝の新幹線で神戸に取材に行く予定になっていたこともあり、早朝から被災状況を伝えるテレビの画面にかじりついていたら、第一報に登場するのは横倒しになった高速道路ばかり。ついで崩れ落ちた駅舎や新幹線が現われ、交通が完全にやられたことが分かるが、どうも報道陣の注目は交通機関に集中しており、なかなか個々の建物の様子までは手が回らない。そのうち、道路に向かつて倒れかけたビルや、木造密集地で火事が点々と発生している映像が現われるようになるが、あいかわらず個々の建物については分からない。

身近くなって、神戸在任の私の研究室出身者から電話がある。

「山手の西洋館の様子は遠くて確認できないが、勤め先の近所のビジネス街を回ったところ、第一勸銀の石の列柱は倒れて折れているところがあるし、あるビルは通り側の石造の外壁一枚を残して煉瓦造の中側は完全に崩れ落ちてガレキの山になっている。しかし、まったく大丈夫な郵船ビルのようなものもあり、歴史的な建物の被害の全体的な様子はつかみきれない。」

話を聞きながらウソであつてほしい、と反射的に思った。列柱が崩壊していたという第一勸銀神戸支店の

神戸の西洋館はどげんか

藤森照信

切にしてくれていて、戦後に取り付けた目立つ看板も撤去し、いにしえの風格を現代のストリート光景に生かすべく尽力していた。

それが壊れた。この重大さが背筋の辺りでヒリヒリと感取された。

しかし、二日目、三日目、テレビに映るのは倒壊した現代のビルと火事の様子ばかり。もちろんそつちの被害こそ人命に直結しているのだから重要なのは分かるが、倒れた高速道路を何日も繰り返す時間があるなら、山手の西洋館の様子になぜ時間をさかない。おそらく、現場に飛んでいるテレビ会社のスタッフの頭には、神戸が明治の西洋館をはじめとする日本の近代建築（幕末・明治から戦前までの建物）の宝庫であるなんて事実は、インプットされていなかったのだ。

ここ二〇年近く、建築探偵などと称して仲間といっしょにそうした近代建築の啓発に精を出してきた者としては淋しい。

歴史的な建造物の被災の様子がおよそ分かったのは一週間以上たってからで、旧ハンター邸や風見鶏の館といった国の重要文化財については文化庁の調査官から、未指定の大量の近代建築については神戸をはじめ京都、大阪に在任する建築探偵仲間から情報が入った。現地在任の建築探偵の面々によると、被災後、数日間は、「これまで自分たちがしてきたことは何だったんだろう」という、精神的ダメージが大きくて何もする

気になれなかつたという。そして、口々に、「信じられないような壊れ方をしたものもあり、とにかく現地を見ないと、この地震は分からない。」

個々の建物の様子を聞くと、ガレキと化したもの、数日後現地に行つた時にはすでに跡形もなく取り片づけられていたもの、直せるかどうか境のもの、そして全く大丈夫だったもの、とにかくいろいろなタイプがあり、一概にどうこう言えないという。現在（三月中旬）、阪神間全域の歴史的建物について一棟一棟をチェック中であり、もう少ししたら全容が分かるそうだ。

うれしい情報も入った。国の重要文化財の旧十五番館はベシヤンコに潰れてしまったが、さいわい木造ゆえ柱や梁や装飾は傷つきながらも残っており、それらを生かして再建されるという。第二次大戦でガレキと化したポータランドの街などは、昔の写真と図面をそっくりに再建されているくらいだから、木造の再建など日本の大工技術をもってすればお手のものだろう。

未指定の西洋館で、明治末のオール・ヌーヴオー建築として知られる須磨の鶴崎邸のオーナーから、「神戸市から被害診断の人が来て、半壊状態で危ないからいつ壊したほうがいいと言われたが、なんとか元に戻したい」との電話。もちろん、修理再建は可能と元気づけ、その方面に詳しい現地の建築家を紹介した。その後の話では、再建に向かって進んでいるそうである。